美術新報
第拾四巻
第參號

時言

賞美章の第三回贈呈

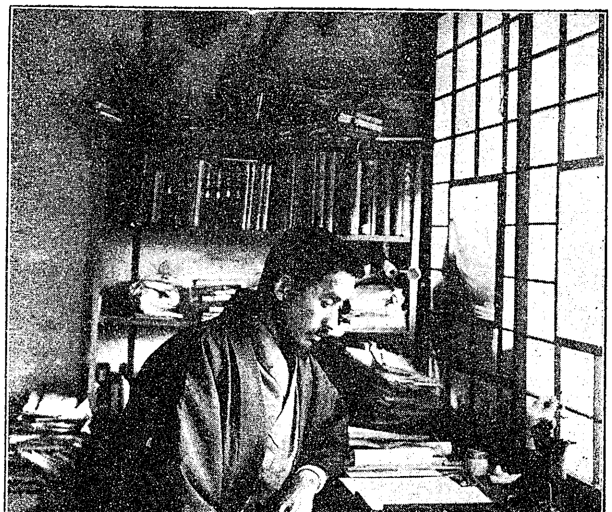
吾人は毎年の新年號に於て、我等の賞美章を贈呈すべき作家と作品とを發表するを嘉例とす、是れ吾人の最も光榮とし、又最も樂しとするところなり。茲にその第三回贈呈を發表するに方り、例に依て數言を叙せん。

思ふに、鑑賞の難き、褒賞の濫りにすべからざる、今更ら喋々を待たざれども、吾人の賞美章贈呈者を選ぶや、常に最も愼重に愼重を加へて、萬遺算なからんことを期せり、盖し單に賞を吝むにあらず、賞美章の眞價を傷はざらんことを欲すると同時に、作家を累することなからんが爲なり、吾人が昨一年間に公表せられたる作品を通觀して、贈賞を議するに際しても、亦此心懸けを忘れざりき。

斯くて、吾人は彫塑に於て朝倉文夫氏を推し、工藝に於て香取秀眞氏を擧ぐるに決したり。

朝倉文夫氏は、元來技巧を主とする作家にして、その練達せる手腕の、我彫塑界に於て群を拔けるは、何人も之を認むるところなるが、屢々健腕の爲に、却て技巧の表面に走りて、内容の空疎を致すとの評なきにあらず。然れども、氏も亦一たび興の來るに會へば、佳品乃ち成るなり。吾人は氏の『いづみ』を以て、昨一年間の彫塑界に於ける最良の製作と信ずるのみならず。實に近數年間に於ける我邦の彫塑界に傑出せる作品の一なりと思惟す。その蟠まりなき、なだらかなる技巧の味は、ふくらかに、又匂ほやかに、强て衒はれたる内容の伴はざるが爲に、如何に快く受け容れらるゝよ、そは熟したる技巧が、偶ま感興に驅られて產み出せる佳品なり。

朝倉文夫氏近影



香取秀眞氏近影

香取秀眞氏は、高古雅醇の趣味を以て、博覽廣鑑の識力を以て、方今の鑄金界に比類を絶つと謂ふも過褒にあらず、その根ざし深きクラシカルなる趣味は總ての氏の作品を彩りて、その特性の一を爲し、銅なる單一の材料を驅使し活

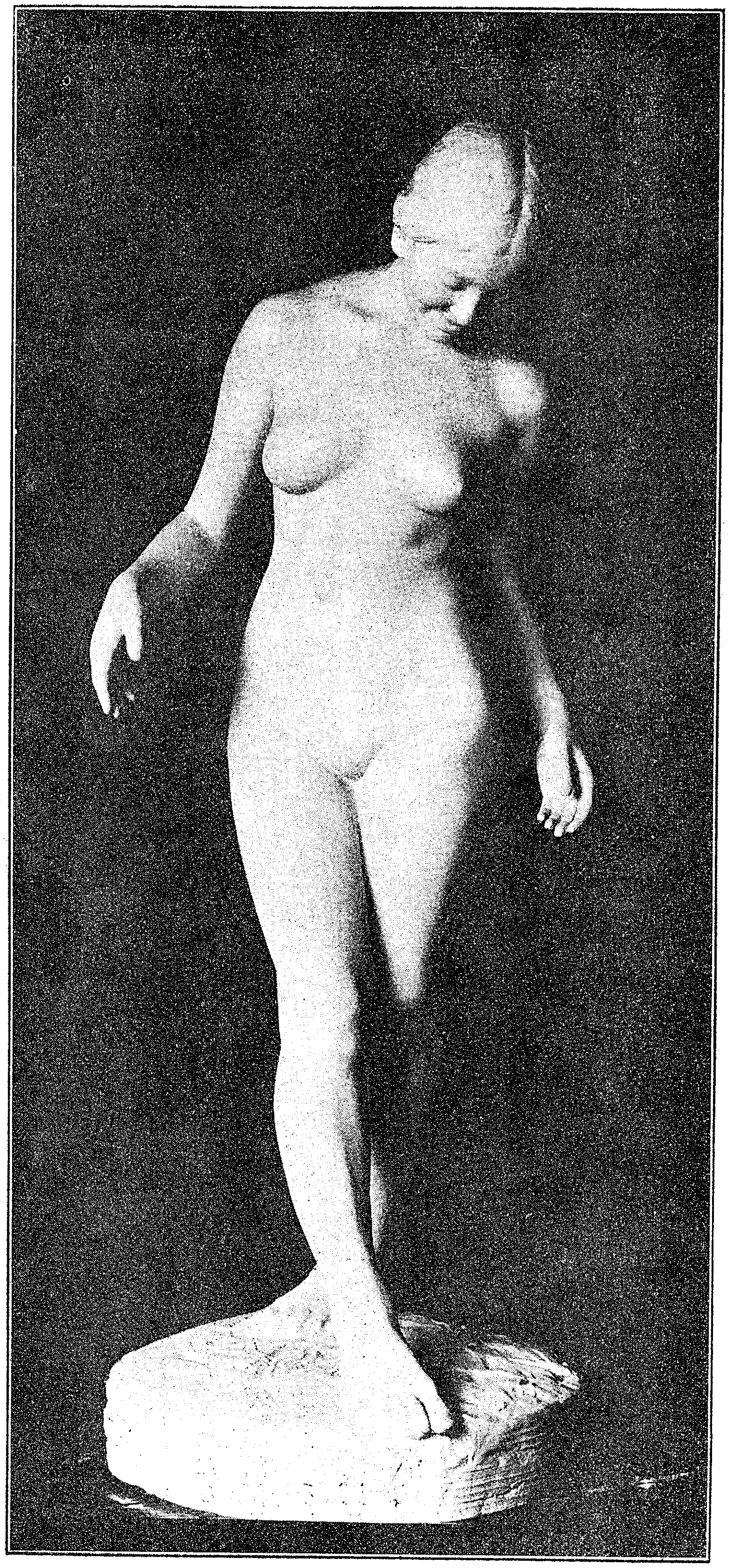
用して、能く深遠なる色を湛へしめ、渾厚なる味ひを含ましめ、其形容固より遒勁にして嚴肅の調を帶び、鑄肌の觸覺的快感に於ても、密徒らに密ならず、粗徒らに粗ならざるの美あり、彼の平滑にして淺薄に、精巧にして卑俗なる製品多き中に於て、含蓄饒く、氣品高く、優に藝術として鑒賞すべき氏の作品を有するは、我鑄金界の誇りならずや。

獅子鈕香爐　香取秀眞氏作

試に昨年の氏が公表したる作品を概觀して優秀の作品を列擧せんか、大正博覽會に出でたる瑞獸置物あり、三具足あり、吾樂の獅子鈕香爐あり、三越の獅子鈕香爐あり、鑄金會の圈足空漏文四耳花瓶あり、孰れも高古雅醇の韻致と氣品とを具へたるものにあらざるはなし。特に古調と生氣とを併せ有する瑞獸置物を以て之が代表作として、我等の賞美章を擬したるなり。

　其他各科に對して各々贈呈者を擧ぐるを得ざりしは遺憾とするところなるも、我等同人が一齊に嘆美し推賞するに至らざる限り、之を見合はすは不得已なり。

　建築は姑く措き日本畫の如き、洋畫の如き、一年間幾千點の作品發表せられたるが故に、佳品秀作決して絶無と謂ふべからず。然れども、今尙ほ試作的の時期を脱せざるが爲にや、新奇なるも獨創に乏しきあり、內容を重んずと稱して毫も之を表現せざるあり、或は作爲に陷り、或は虛喝に走り、或は細工に流るゝものも尠からず。中には着實に故きを溫ねて更に新意を出せるもあり、或は自然を師として自家の特趣を成せるものもなきにあらず。然れども、不幸にして未だ吾人が、喜び進んで、我等の賞美章を捧げんと欲するものはあらざりき。吾人は切に今年の收穫の大に豐かならんことを祈る。



いづみ　朝倉文夫氏作